

## 【特別講演】 第7席

## 『経籍訪古志』について

東京 小曾戸 洋

『経籍訪古志』は幕末に成立した漢籍善本の解題、もしくは調査研究書である。主編者は渋江抽斎と森立之であるが、発端は狩谷掖斎主催の研究会にあり、小島宝素、多紀元堅がその継続・推進に尽力し、小島春沂、堀川舟庵、伊沢柏軒、海保元備らが協力して、安政3年頃に完成した。

全8巻。巻1～6は経・子・史・集で、巻7・8は医部に充てられる。編者、参画者のほとんどが医学者であるから、医部がとりわけ充実しているのは当然である。経・子・史・集部と医部の記事内容は、いささか性質を異にしており、もとは別に企画されものと考えられる。それは『経籍訪古志』の稿本類には医部が含まれておらず、また医部は本来『医籍訪古志』と命名され、『経籍訪古志』と合綴して刊行されるにあたって『経籍訪古志補遺』と称されたことから知られる。

『医籍訪古志』では、医薬書を、医経・経方・本草・針灸・脈学・傷寒・方書・外科・婦人・小児・養生の11類に分ち、合計190種の善本（抄本・刊本）が著録されている。明清の医書には及ばない。その所蔵元は、聿修堂・存誠薬室・容安書院・昌平学・躋寿館・酌源堂・懐仙閣・宝素堂・崇蘭館・楓山秘府・寄所寄楼・高階経宣・米沢侯・竹田純道・尾張藩・千之堂・称意館・生起館・河野氏・畑柳平・荻野元凱・雲州侯・湯河氏・百百氏・杉江喜三・養閑斎……………などと表記してある。

医籍の書誌学に関しては当時『留真譜』（書影図録集）や『医籍考』（目録学・序跋資料集）なども作られた。『医籍訪古志』はあくまで現伝テキストのうち、どれが最善本であるかを究めた鈔本・版本鑑定学書である。種々のテキストを集めて照合しつつこの書を読み進めていけば、必ずや書物の鑑定眼が養われる。私の第一の愛読書で、私に書誌学の面白さと深さを教えてくれたのはこの書にほかならない。最終的目標として、現代補訂版『医籍訪古志』を編んでみたいというのが私の夢である。